

熊から王へ カイエ・ソバージュⅡ

中沢新一著 (講談社選書メチエ・1600円)

九月十一日のニューヨークのテロ事件以後、アフガン、中東と報復の連鎖が続いている。しかし、この連鎖を断ち切る論理は、私の知る限りどこにも発見できなかった。唯一、この本は、世界をまったく別の視点から照らし出している。

著者の主張は、およそ四点ある。

第一、古代の神話を分析すると、太平洋を囲むようにして、南米、北米の太平洋岸からベーリング海峡を超えて、一方はアムール川畔へ、そして一方はサハリン、日本列島、朝鮮半島をかすめて中国南西部にいたる半月形の広大な地域に、同じ世界観、同じ社会の構造の痕跡を認めることが出来る。

第二、同じ世界観とは、著者が「対称性の世界」と呼ぶもので、自然(たとえば熊)と人間は、対立するものではなく、入れ替わることが可能な存在だという考え方である。熊は人間に殺されて肉体を与え、人間は熊の霊を丁寧に祭り、その自然の贈り物を大事に扱う。熊は人間に肉を与えると霊の世界に戻る。その世界は、人間を始めあらゆる動物の霊の集まるところで、そこでは人間も熊も親子、兄弟なのである。この自然と人間の対称的な世界が、自然破壊を防ぎ、人間が自然の生態系のなかで生きることが可能にする。

自然と人間が入れ替われた時代

と、あの霊の世界の持つ力に直接ふれるシャーマン、あるいは戦いで活躍する戦士を区分する構造である。冬の闇の祭礼によって発揮される自然の権力は、祭が終われば森の奥深くに返され、シャーマンは社会の周辺に隔離される。あるいは戦士は戦いが終われば住民の一員にもどって首長が人々の生活を円滑にする。

第四、以上の世界観、社会構造によってここには、人が人を支配する権力も、その権力を背景にする国家も王もない。

私たちは、かつて祖先の持っていた、このような世界観を忘れていたのではない。私たちの住む世界は対称性を失って、人間優位の非対称性の世界になり、全ては物質と権力に集中し、自然破壊、報復の連鎖が無限に続いていく。それを止めるには、もう一度、この神話のなかの「野生の思考」をふりかえる必要があるのではないか、というのが著者の主張である。

なかでも説得力に富むのは、宮沢賢治の小説「水河鼠の毛皮」からはじまって、インディアンの山羊と人間の神話、熊と結婚した少女の話、折口信夫の「古代研究」を通してサノオ神話の分析にいたる神話分析である。その分析の鮮やかさは、細密で、ほとんど美しくさえある。

この分析を通して、自然を象徴する森林の王者「熊」と人間との関係が鮮明に浮かび上がってくるばかりでなく、その関係の深さが、反転して私たち自身と自然との関係をふりかえらせるのである。

毎日新聞 02(H14).7.7

もう一つ説得力があるのは、このような巧妙かつ微妙につくられた社会が、鋼鉄製の武器――「刀」によって崩壊し、国家権力が生まれてくるプロセスを描いたところである。

この国家の起源が本書後半のヤマ場であり、迫力にとんでいる。前半の神話分析、後半の国家の起源を讀んで、私は深く心を打たれた。

むろん今日の発達した国家、高度文明社会がとっくの昔に失われた神話で改革できるかという意見はあるだろう。しかし、この一見現実的には無力に見える言説が私たちの目を開かせてくれる点は大きい。少なくともこの視点が、現代を相対化する大きな契機になることは疑いない。

その点で、この本は、私の心を動かしたばかりでなく、現代において刺激的かつ最も重要な一冊である。